日本語母語話者と中韓日本語学習者の持つ格助詞デのカテゴリー構造比較

森山　新・冉　愛玲

1. 研究目的

格助詞デは様々な意味・用法を持っている。しかし今まで日本語教育ではこれらの意味・用法を教えるにあたり、意味相互間の関係について言及することは少なく、具体的な例文を提示しつつ個々に教えることが多かった。またこれまでの言語理論においても、その多くは格助詞デのような多義語の１つ１つの意味がどのような関係で結びついているのかについて、十分な言及をしてこなかった。ところが最近、認知言語学は多義語の意味構造について触れ、多義語の個々の意味は、核となるプロトタイプ的な意味から動機づけられて拡張したものであり、その結果多義語はプロトタイプを中心としたカテゴリー構造[1]を持つとしている。また認知言語学では言語の習得をカテゴリー化のプロセスとしてとらえているが、意味のカテゴリー構造と習得との関係について、プロトタイプ理論の考え方を踏襲し、原則としてプロトタイプ的用法の習得が早く、順次その拡張的用法へと習得が進むとしている。しかしこの見解はこれまで、実証的な裏づけに基づいたものとは言い難いものであった。

これに対し Tomasello（2003）は第一言語（母語）習得の数多くの先行研究や独自の研究をもとに、習得のプロセスをより実証的に明らかにした。これによると大まかには認知言語学の言語習得観である「使用基盤モデル（usage-based model）」の正当性が示されたものの、3 歳以前においては、比較的保守的な学習が行われ、インプットの影響が大きく、必ずしもプロトタイプの習得が早いとは言えないことも明らかにした。

また第二言語習得の場合にはカテゴリーやプロトタイプ形成に第一言語が影響を及ぼすなどの要因により、学習者が独自のプロトタイプ（中間言語プロトタイプ）を形成する可能性もあるなど、プロトタイプと習得との関係はより複雑であろう。しかしプロトタイプと類似の概念である有標性と習得との関係については、第一言語習得のみならず第二言語習得との関係を示唆する研究がいくつか見られ（Kellerman 1979、Gass & Ard 1984、Rutherford 1982、Mazurkewich 1984、1985、Wode 1984、Bardovi-Harlig 1987、Tanizawa 1989 他）、これらでは無標性の高い項目が有標性の高い項目に比べて習得されやすいという結果が報告されている[2]。それが事実であるとすれば、プロトタイプを中心としたカテゴリー構造が習得に影響を及ぼし、プロトタイプの用法の習得がそうでない用法に比べ先行する可能性を否定することはできない[3]。また、第二言語習得においても、カテゴリー形成には時間がかかるわけであるから、カテゴリー形成以前には、第一言語同様、必ずしもプロトタイプが先とは限らない可能性もある。

森山（2004）では、多義語としての格助詞デの意味構造が具体的に示され、プロトタイプの用法が＜場所＞用法であり、そこから＜道具＞、＜様態＞、＜原因＞、＜時間＞などの用法が拡張していること、そ

れぞれの用法内でも具体的でプロトタイプ的な用法からさまざまな用法が拡張していることが述べられている。しかしこの研究はあくまでも認知言語学の観点に依拠した理論的研究であり、そこで主張されている意味構造の心理的実在性について実証的に明らかにされているわけではない。また日本語を第二言語として学ぶ学習者が構築するデの意味構造がどのようになっているのか、日本語母語話者のそれと同じであるのか、異なっているとすればどのように異なっているのか、などについては述べられていない。

このことをふまえ、水口・森山（2006）では日本語母語話者（以下 JNS）と韓国語を母語とする日本語学習者（以下 KJL）のデの意味構造を実験的に明らかにし、森山（2004）の意味構造分析の妥当性を検証するとともに、日本語母語話者と日本語学習者の意味構造の違いを分析した。本稿はこの結果に加え、さらに中国語を母語とする日本語学習者（以下 CJL）を被験者に加えてデの意味構造を実験的に明らかにし、JNS や KJL の意味構造との異同を明らかにする。

2. 先行研究

認知言語学的観点からの多義語の放射状カテゴリー構造の研究としては、英語 over を研究した Lakoff（1987）や Dewell（1994）、take の研究を研究した Norvig & Lakoff（1987）などが代表的である。このうち Lakoff（1987）や Norvig & Lakoff（1987）は、多義語のカテゴリーはプロトタイプ的な意味から、メタファー、メトニミー、イメージスキーマ変換などのさまざまな動機づけによってカテゴリーの拡張が起き、その結果、放射状のネットワークが築かれるとしている。また Dewell（1994）は中心的なイメージスキーマとそこからのイメージスキーマ変換によって多義語 over の放射状カテゴリー構造を説明している。

また外国語習得の立場から多義語の意味構造にふれた研究としては、今井（1993）、Shirai（1995）などがある。今井（1993）は英語母語話者と日本語を母語とする英語学習者の動詞 wear の意味構造の違いを実験的に明らかにし、英語教育への応用を試みている。その結果、(1) 学習者と母語話者とではその意味構造がさまざまに異なること、(2) 学習者の意味構造は日本語の「着る」の影響を受けていること、(3) 母語話者の意味構造において、それぞれの意味・用法はプロトタイプを中心に動機づけられ体系的であるのに対し、学習者のそれはそのような関連づけが弱く、拡散的であること、などが述べられている。

Shirai（1995）では、日本語母語話者の英語学習者を対象に、put の習得に関する調査を行い、(1) 学習者のプロトタイプ形成は母語によって制限されていること、(2)「置く」に対応しないようなプロトタイプ性の低い意味は習得が困難であること、などが述べられている。

一方、認知言語学の観点からデの多義について触れたものとしては、菅井（1997、2001）、間淵（2000）、杉村（2002）、森山（2002、2004）、水口・森山（2006）、岡（2007）などがある。

菅井（1997、2001）では、デのさまざまな意味機能に対し包括的な特徴づけを試みている。それによれば、デ格の意味機能は前景的な主格、対格の「背景的側面を提示すること」であり、動詞の語彙的意味によって変化を被らずに前景を限定するものであるとしている。またデの個別の意味は、前景的な主要格成分との相互関係によって特徴づけられるという。

間淵（2000）はデに関して通時的調査を実施し、意味拡張のプロセスを明らかにした。それによれば、基幹的用法は場所格で、そこから手段格・様態格がまず派生し、さらに後に動作主格や原因格が基幹的用法から派生したと述べている。

また杉村（2002）では、日本語の格助詞（ニ、カラ、ヘ、マデ、デ、ト）の意味の違いを明らかにし、認知的イメージを用いて教える方法について論じている。これによればデのプロトタイプ的な意味は菅井（1997）を引き継ぎ､「主格または対格に対する背景的側面（領域）の提示」としている。また「原因」､「様態」、「原材料」、「道具」はこうした背景的側面（領域）が抽象化されたものであるとしている。

森山（2004）は、認知言語学的観点からデの意味構造を理論的に明らかにし、以下のような点を明らかにした（「 」で表された用法は＜　＞で表された用法の下位カテゴリーであることを示す）。

(1)　デは前景を構成する動力連鎖に対し、ある背景を補足的に表す「背景格」である。

(2)　デの用法には＜場所＞（場所、場、範囲、数量限定、動作主）、＜道具＞（道具、手段、材料、構成要素）、＜原因＞（原因、理由、根拠、動機・目的）、＜様態＞（動作主の様態、被動作主の様態、出来事・作用の様態）といった５つの下位カテゴリーがある。

(3)　デのプロトタイプ的用法は＜場所＞用法である。

(4)　「背景」としての概念が主観化すると機能的な背景を表すようになり、＜道具＞、＜様態＞、＜原因＞などの用法が拡張する。

(5)　「場所」用法で、場所、動作など一部が抽象化したり、境界が焦点化されたり、メトニミー変換により場所が背景化（動作主が焦点化）したりすることにより、「場（抽象的場所）」、「限定（範囲、数量限定）」、「動作主」などの拡張的な用法が派生する。

(6)　＜時間＞用法も、空間から時間へのメタファー写像により、プロトタイプとしての＜場所＞用法から拡張したものである。

(7)　それぞれの用法の内部でも、抽象化、内在化や焦点化などにより、様々な用法が拡張している。

水口・森山（2006）では森山（2004）の理論的分析に対し、その妥当性を実証的に検証するとともに、JNS と KJL のデの意味構造の違いを明らかにし、以下のようにまとめている。

(1)　森山（2004）の理論的な意味構造分析は大まかに言えば妥当である。しかし「数量限定」はむしろ＜場所＞より＜様態＞に近く、「構成要素」は＜道具＞より＜原因＞に近いなど、一部修正が必要である。

(2)　KJL におけるデの意味構造は、＜場所＞は確立されているが、その他の用法では、その境界が明確ではないなど、カテゴリー化が不十分である。

水口･森山（2006）の結果をふまえ､森山（2004）に修正を加えると､デの意味構造は以下のようになる。

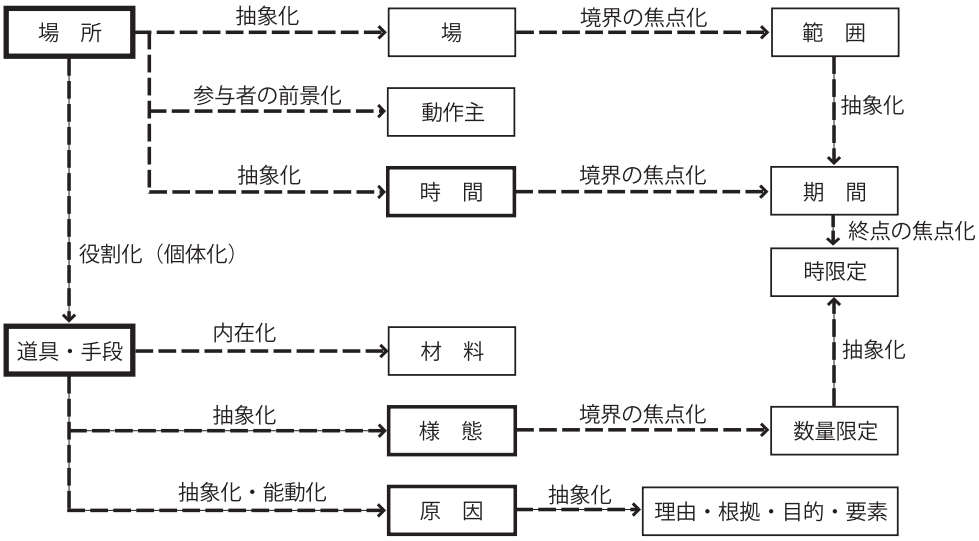

図１　格助詞デの意味構造

図１のそれぞれの用法の例文は以下のようなものである。

2004 年の オリンピックは アテネで 開かれる。［場所：場所］

彼は 社会主義の 環境で そだちました。［場所：場］

彼は この クラスで一番 背が 高いです。［場所：範囲］

その 事件は 警察で しらべて います。［場所：動作主］

食事の あとで、勉強を します。［時間：時間］

成長の 過程で ときどき 見られる 現象です。［時間：期間］

長かった 夏休みも 明日で 終わりです。［時間：時限定］

日本人は はしで ごはんを 食べる。［道具：道具］

毎日 地下鉄で 学校へ来ます。［道具：手段］

この つくえは 木で できて います。［道具：材料］

病気で 学校を 休みます。［原因：原因］

彼の アイデアは、その 点で おもしろいと 思います。［原因：理由］

テストの 結果でクラスを 決めようと 思います。［原因：根拠］

日本の 文化という テーマで 論文を 書きました。［原因：構成要素］

出張で 大阪へ 行って きました。［原因：目的・動機］

夕ごはんは 自分で作って 食べます。［様態（動作主）］

夜 おそいので、小さな 音で 音楽を 聞きました。［様態（被動作主）］

時速 200 キロの スピードで 走って います。［様態（出来事・作用）］

この へやは 30 人で いっぱいに なります。［様態：数量限定］

プロトタイプが「場所」であり、「場所」の抽象化により「場」が、さらにその境界が焦点化されることにより「範囲」の用法が拡張すること、「場所」に関係する参与者が前景化し「動作主」用法が拡張し

たこと、「場所」の抽象化（メタファー拡張）で「時間」用法が拡張し、境界が焦点化されて「期間」、さらに終点に焦点が移ると「時限定」が拡張すること、「場所」がモノ化し、役割化すると「道具」や「手段」となり、そこから内在化により「材料」が拡張すること、「道具」の抽象化により「様態」や「原因」が拡張すること、さらに「様態」から「数量限定」、「原因」から「理由」、「根拠」、「目的」、「構成要素」が拡張することなど、意味の拡張構造が示されている（詳しくは森山（2004）を参照）。

さらに岡（2007）では、デ格には場所の用法とモノの用法とがあり、「場所」、「道具」がそれぞれの中心的用法で、「場所」から「時間」、「原因」、「様態」が、「道具」から「材料」、「手段」などの用法が拡張したとして、図２のような意味のネットワークを示している。

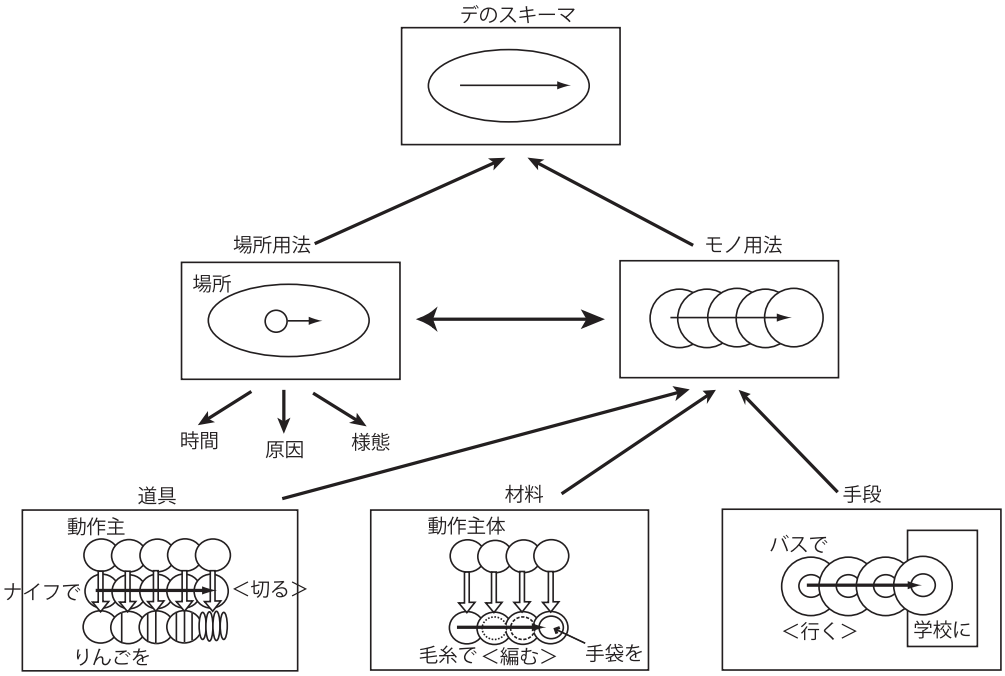

図２　岡（2007）が提示するデのスキーマと意味ネットワーク

3. 調査

3.1 調査対象者と調査時期

調査対象者は、日本人大学生（日本Ｍ大学人文学部１～４年生）52 名と韓国人大学生（韓国Ｋ大学日本語学科）３年生 17 名、４年生 20 名の計 37 名、中国人大学生（中国Ｋ大学日本語学科）３年生 50 名である。JNS と KJL のデータは水口・森山（2006）のものと同じであるが、データの分析は再度行った。

韓国の学生は調査時に日本語能力検定試験２級合格者が８名・１級合格者が７名おり、その他の学生も日本語能力試験１・２級準備中であり、本調査の調査文に使用されている語彙を、すべて理解するに十分なレベルであった。なおＫ大学では、1 年次の後期に日本語文法及び日本事情を週６時間、2 ～４年次には、文法、漢字や日本歴史や作文、及び聴解などの専攻科目を平均週９時間と日本語ネイティブ教師による会話授業を週３時間設けており、調査対象者の自習以外の日本語学習時間は、平均して 12 時間程度である。

中国の学生は調査時に日本語能力検定試験2級合格者が9名・1級合格者16名おり、その他の学生も日本語能力試験1級準備中であり、本調査の調査文に使用されている語彙をすべて理解するに十分なレベルであった。K大学では、2年次から日本歴史や作文などの専攻科目を週8時間、日本人教師による会話授業を週に2時間を設けており、ほかに1年次後半から2年次後半まで読解・聴解の授業もあった。

調査はJNSに対しては2004年6月に、KJLには2003年8月、CJLには2007年6月に実施した。

3.2　調査材料と方法

調査材料には、2章で示した19文を一文ずつ書いたカード(計19枚)を提示した。なおCJLに対しては、「場所」用法の例文を調査実施時期に合わせ、「2008年のオリンピックは北京で開かれる。」に変えた。

そして、デの意味の類似性に基づき、任意の数のグループに分けるよう、対象者に指示した。その際、一つのグループに一つの用法しかないような場合もありうることとし、また一つの用法が複数のグループにまたがって所属することはありえないこととした。調査実施にあたっては時間制限を設けなかった。

4. 結果と考察

調査対象者から得られたデータを基にした類似性行列の作成、及びSPSS（Ver.10）を用いて非計量的多次元尺度解析を行った。多次元尺度法は何らかの類似性のデータに基づいて、項目間のつながりを多次元空間内の距離の遠近によって示す手法で、複雑な意味構造を、客観的な数量的尺度によって捉えやすく表示するという点で、語の意味構造を探り出すのに適した分析方法で、田中（1989）や今井（1993）など、認知言語学的な観点に基づいた多義語研究においてよく用いられているものである。

統計処理の結果、得られた適合度は、JNSが2次元でStress =0.31621、RSQ =0.54199、3次元でStress =0.21008、RSQ =0.74571、KJLでは2次元でStress =0.32102、RSQ =0.58397、3次元でStress =0.21459、RSQ =0.77917で、CJLでは2次元でStress =0.31886、RSQ =0.55833、3次元でStress =0.21812、RSQ =0.70231で、いずれも2次元よりも3次元の値がストレス値も低く、RSQも1に近づいているため、3次元の結果を用いた。

以下では、JNSとKJL、CJLにおけるデのカテゴリー形成及びその相違点を考察していく。

4.1　JNSのカテゴリー形成

図3はJNSのデの多次元尺度解析の結果を図示したものである。図3を見ると、JNSがデの意味・用法を大まかに＜場所＞、＜道具＞、＜原因＞、＜様態＞、＜時間＞に分けた森山（2004）の認知言語学に基づく理論的考察が妥当であると言えるが、より厳密に分析を行うために、図3のもとになったデータ（表1）を見ながら、JNSがどのようなカテゴリー形成を行っているのか明らかにする。また、表1に示されたデータの3つの座標軸がどのような意味特性であるかを考察し、JNSがどのような意味成分に基づいてカテゴリー形成を行っているのかについても明らかにする。表中曇りがかかっている部分は数値が＋0.5を越える数値を表し、本文では以下これを「＋」と示す。▲は－0.5を下回る数値を表し、本文中では「－」と示す。＋でも－でもない+0.5～－0.5のものは本文中で「±」と示す。

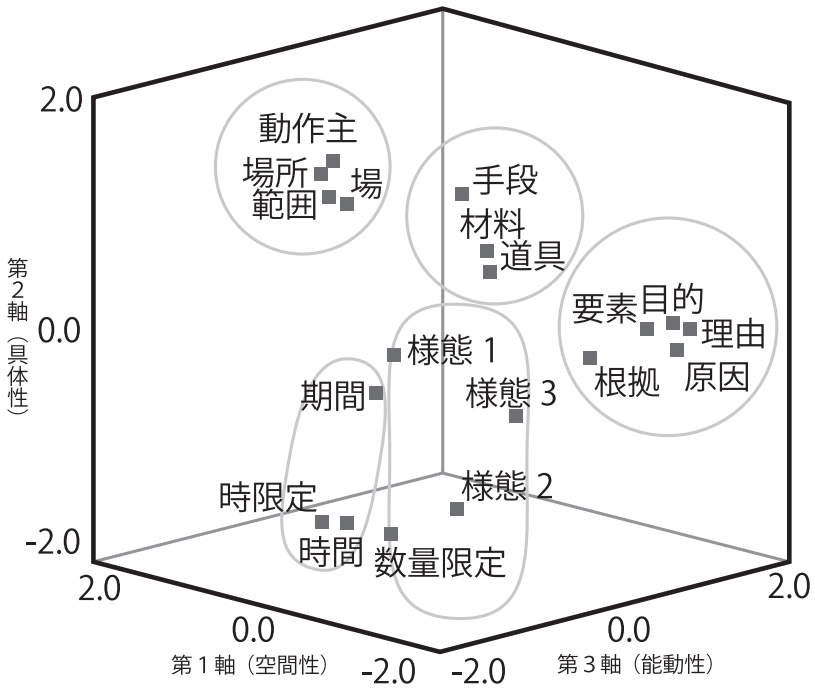

図３　JNS 成人の多次元尺度解析の結果

まず、デの下位カテゴリーのまとまりであるが、①～④の＜場所＞では第１軸で＋、第２軸で＋、第３軸で±、⑤～⑦の＜時間＞では第１軸で＋、第２軸で－、第３軸で±（⑦は－）、⑧～⑩の＜道具＞では、第１軸で－、第２軸で＋、第３軸で－、⑪～⑮の＜原因＞では第１軸で－、第２軸で±（⑬は－）、第３軸で＋で、これらはカテゴリーとしてまとまりがある。ただ⑯～⑲の＜様態＞では第１軸で－（⑲は±）、第３軸では－でまとまっているが、第２軸は－と±に分かれている。したがって母語話者のデの下位カテゴリーは、＜様態＞はややまとまりに欠けるものの、それぞれカテゴリーとしてのまとまりを有しており、＜場所＞、＜道具＞、＜原因＞、＜様態＞、＜時間＞に分けているとする理論的考察は妥当性があるといってよいだろう。

次に３つの軸が何であるかを分析する。

第１軸は＜場所＞と＜時間＞が＋である反面、＜道具＞、＜原因＞、＜様態＞の多くが－となっている。ゆえに第１軸は＜場所＞、＜時間＞などのカテゴリー化に重要な意味成分である「空間性（トコロ性）」を示すものと思われる。これが－になると、トコロ性に対峙するものとしての「個体性（モノ性）」で、＜道具＞、＜原因＞に重要な意味成分である。＜様態＞も「空間性」よりは「個体性」を有する。

次に第２軸は、＜場所＞、＜道具＞が＋である反面、＜時間＞、そして＜原因＞や＜様態＞の一部で－となっている。＜場所＞と＜道具＞が高い数値を示しているため、「具体性」を示すと思われる。そのため抽象性の高い＜時間＞などは－の数値になっている。

第３軸は、＜原因＞だけが＋であり、それ以外が－または±となっていることから、「能動性（原因性）」であろう。＜場所＞、＜時間＞、＜道具＞、＜様態＞は「能動性」がないため、－または±となっている。

表 1　JNS 成人の多次元尺度解析の結果

用法	番号	例文	第 1 軸	第 2 軸	第 3 軸
場所	①場所	アテネで	1.4951	1.0885	0.0308
	②場	環境で	1.4599	0.7735	0.2729
	③範囲	クラスで	1.5400	0.8426	0.1550
	④動作主	警察で	1.1493	1.3021	−0.1798
時	⑤時	あとで	0.8342	▲ 1.7208	−0.4215
	⑥期間	過程で	1.3176	▲ 0.8449	0.4774
	⑦時限定	明日で	0.8517	▲ 1.6223	▲ 0.6559
道具	⑧道具	はしで	▲ 0.9794	1.0819	▲ 0.8736
	⑨手段	地下鉄で	▲ 0.5674	1.4645	▲ 0.6813
	⑩材料	木で	▲ 0.9576	1.0072	▲ 0.8079
原因	⑪原因	病気で	▲ 0.6199	−0.3256	1.7563
	⑫理由	その点で	▲ 0.7218	−0.1145	1.7688
	⑬根拠	結果で	0.1474	▲ 0.5320	1.6048
	⑭要素	テーマで	▲ 1.2921	0.2282	0.6035
	⑮目的	出張で	▲ 1.1958	0.1831	1.0240
様態	⑯様態 1	自分で	▲ 0.5854	0.2490	▲ 1.5303
	⑰様態 2	スピードで	▲ 0.7296	▲ 1.1780	▲ 0.9095
	⑱様態 3	音で	▲ 1.2643	−0.2416	▲ 0.8668
	⑲数量限定	30 人で	0.1180	▲ 1.6409	▲ 0.7670

実験により、「空間性（＋が空間性、－が個体性）」、「具体性（＋が個体性、－が抽象性）」、「能動性（＋が能動性、－が非能動性）」という 3 つの意味が抽出されたが、それを用いてそれぞれの下位カテゴリーの意味要素をまとめると、以下のようになる。なお、ここでは多次元尺度解析で、±など、明確に＋とならなかったものについては一律、－とした。

＜場所＞：［空間性＋（個体性－）、具体性＋、能動性－］
＜時間＞：［空間性＋（個体性－）、具体性－、能動性－］
＜道具＞：［空間性－（個体性＋）、具体性＋、能動性－］
＜原因＞：［空間性－（個体性＋）、具体性－、能動性＋］
＜様態＞：［空間性－（個体性＋）、具体性－、能動性－］

4.2　KJL のカテゴリー形成

表 2、図 4 は KJL の多次元尺度解析の結果を示している（図 4 は見やすいように同じカテゴリーの用法は同じ記号を用いた）。図 4 を見ると一目瞭然であるが、JNS のカテゴリー構造に比べると、下位カテゴリーの一つ一つにまとまりがなく、拡散している。より厳密な分析を行うため、表 2 の数値をもとにさらに詳細に見ていく。

表２　KJL の多次元尺度解析の結果の軸別の値

用法	番号	例文	第１軸	第２軸	第３軸
場所	①場所	アテネで	1.8904	0.2503	−0.3634
	②場	環境で	1.7382	−0.3106	−0.3638
	③範囲	クラスで	1.7963	0.4270	▲ 0.5428
	④動作主	警察で	1.7783	0.3417	▲ 0.5076
時	⑤時	あとで	0.0963	1.4753	1.4655
	⑥期間	過程で	0.9111	▲ 0.7318	1.3578
	⑦時限定	明日で	0.0412	1.1650	1.2924
道具	⑧道具	はしで	▲ 0.7595	0.3960	▲ 1.5136
	⑨手段	地下鉄で	▲ 0.5435	0.4417	▲ 1.5600
	⑩材料	木で	▲ 1.3036	−0.1106	0.3877
原因	⑪原因	病気で	−0.0266	▲ 0.9612	1.2757
	⑫理由	その点で	−0.4461	▲ 1.4353	0.6078
	⑬根拠	結果で	0.0382	▲ 1.7349	−0.3463
	⑭要素	テーマで	▲ 0.9499	0.1466	▲ 1.4298
	⑮目的	出張で	0.2485	▲ 1.5520	▲ 0.7100
様態	⑯様態１	自分で	▲ 0.6115	1.5479	0.4458
	⑰様態２	スピードで	▲ 1.4967	−0.1633	0.1045
	⑱様態３	音で	▲ 1.2967	−0.2779	0.7567
	⑲数量限定	30 人で	▲ 1.1044	1.0860	−0.3563

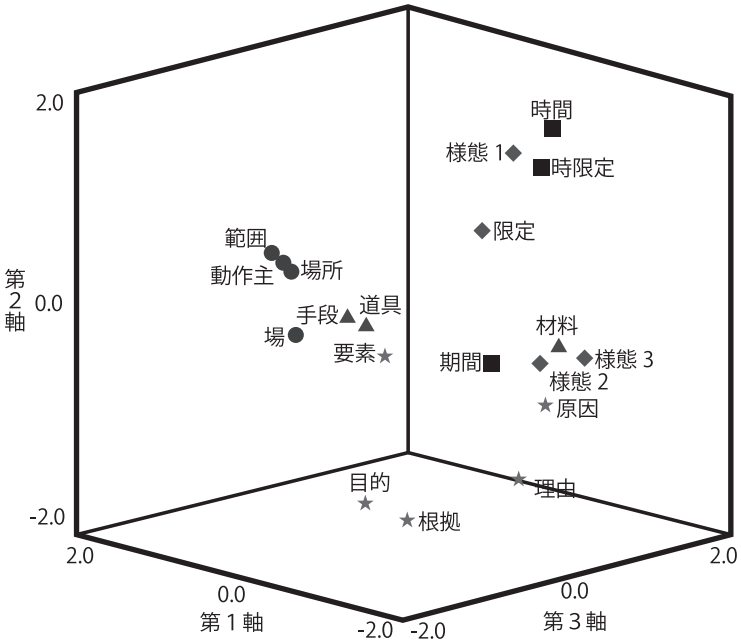

図４　KJL の多次元尺度解析の結果

第１軸は＜場所＞と＜時間＞の一部が＋となっており、「空間性（＋が空間性、－が個体性）」を表していると言える。第３軸は＜場所＞の一部と＜道具＞で－となっており、「具体性（－が具体性、＋が抽象性）」を表している。さらに第２軸は＜原因＞が－となっており、「能動性（－が能動性、＋が非能動性）」を表すと思われる。但しJNSに比べると例外が多く、カテゴリーが十分確立していない。

用法別に見ていくと、まず＜場所＞は①場所、②場、③範囲、④動作主とも第１軸（空間性）が＋、第２軸（能動性）が±で統一され、第３軸（具体性）も±または－となっており、しかもJNSと似た結果になっていることから、＜場所＞用法はかなり確立している。

＜時間＞用法では、第３軸（具体性）では、どれも＋（抽象的）とそろっている。しかし、第１軸（空間性）では⑥期間が＋となる一方で、⑤時間、⑦時限定で±となりやや離れ、第２軸（能動性）では⑥期間が－、⑤時間、⑦時限定が＋となるなどそろっていない。

＜道具＞用法では、⑧道具、⑨手段、⑭構成要素が第１軸（空間性）で－（個体的）、第３軸（具体性）で－（具体的）、第２軸（能動性）では±と、＜道具＞用法としてまとまっているが、JNSでは⑧道具、⑨手段、⑩材料が＜道具＞用法となっており、KJLの＜道具＞用法では⑩がカテゴリーから外れる一方で、⑭がカテゴリーに混じっているなど、JNSと異なっている。

＜原因＞用法では、⑪原因、⑫理由、⑬根拠、⑮目的が第２軸（能動性）で－（能動的）、第１軸（空間性）で±でそろっているが、第３軸では揺れの幅がJNSより大きいこと、⑭構成要素が＜道具＞に近いことなど、＜原因＞用法のカテゴリーもJNSに比べて確立されていない。用法間では⑪原因と⑫理由、⑬根拠と⑮目的とは近いが、全体としてのまとまりはない。

＜様態＞用法も第１軸（空間性）では－（個体的）でそろっているが、その他で揺れが見られる。用法間では⑯様態１と⑲数量限定、⑰様態２と⑱様態３は比較的近いものの、両者の間に距離がある。

以上のようにKJLでは、＜場所＞用法は確立しているものの、その他の用法はJNSに比べると一つ一つのカテゴリーが確立されておらず、まとまりにも欠けている。

カテゴリー内の関係を見ても、＜場所＞（①場所、②場、③範囲、④動作主）は比較的集まっているが、＜時間＞（⑤時間、⑥期間、⑦時限定）では⑥期間が、＜道具＞（⑧道具、⑨手段、⑩材料）では⑩材料が遠く離れ、＜原因＞（⑪原因、⑫理由、⑬根拠、⑭構成要素、⑮目的）では⑪原因と⑫理由、⑬根拠と⑮目的は近いが、全体としてのまとまりはない。＜様態＞（⑯様態1、⑰様態2、⑱様態3、⑲数量限定）では、⑯様態１と⑲数量限定、⑰様態２と⑱様態３は比較的近いものの、両者の間に距離がある。したがって＜場所＞は確立されたがその他で母語話者のカテゴリーと食い違いが見られている。

4.3　CJLのカテゴリー形成

表3、図5はCJLの多次元尺度解析の結果を示している。

KJL同様、図5を見ると、JNSのカテゴリー構造に比べ、下位カテゴリーの一つ一つにまとまりがなく、拡散している。これを表3の数値をもとにさらに細かく分析していく。

第１軸は＜場所＞と＜時間＞が＋となっており、「空間性（＋が空間性、－が個体性）」を表していると言える。第３軸は＜場所＞と＜道具＞で＋となっており、「具体性（＋が具体性、－が抽象性）」を表している。さらに第２軸は＜時間＞の⑤「あとで（時間）」と⑦「明日で（時限定）」、＜原因＞の⑪「病気で（原因）」と⑮「出張で（目的）」、＜様態＞の⑲「30人で（数量限定）」が＋となっており、デ格で表されたことの「後に」もしくは「故に」、述語で表された事態が起きる関係、すなわち「前後／因果関係」であると言え

表３　CJL の多次元尺度解析の結果

用法	番号	例文	第１軸	第２軸	第３軸
場所	①場所	北京で	1.2565	▲ 0.8785	0.8856
	②場	環境で	1.3409	▲ 0.9572	0.4985
	③範囲	クラスで	1.3681	▲ 0.9212	0.2996
	④動作主	警察で	▲ 1.0506	−0.0780	1.3437
時間	⑤時	あとで	1.2887	1.2184	0.3552
	⑥期間	過程で	1.4834	▲ 0.6231	0.3700
	⑦時限定	明日で	1.4018	1.0276	0.1871
道具	⑧道具	はしで	▲ 1.4685	−0.3789	0.8208
	⑨手段	地下鉄で	▲ 1.4750	−0.3912	0.8114
	⑩材料	木で	▲ 1.4809	−0.4756	0.6720
原因	⑪原因	病気で	0.0385	2.0308	0.0627
	⑫理由	その点で	1.0793	▲ 0.9196	▲ 0.5436
	⑬根拠	結果で	▲ 0.8022	▲ 0.6716	▲ 1.2110
	⑭要素	テーマで	−0.2076	▲ 0.7041	▲ 1.4779
	⑮目的	出張で	0.0045	2.0172	−0.0041
様態	⑯様態１	自分で	▲ 1.1946	0.2070	1.1725
	⑰様態２	スピードで	▲ 0.7996	−0.1486	▲ 1.4649
	⑱様態３	音で	▲ 0.9860	−0.2916	▲ 1.2997
	⑲数量限定	30 人で	0.2033	0.9383	▲ 1.4779

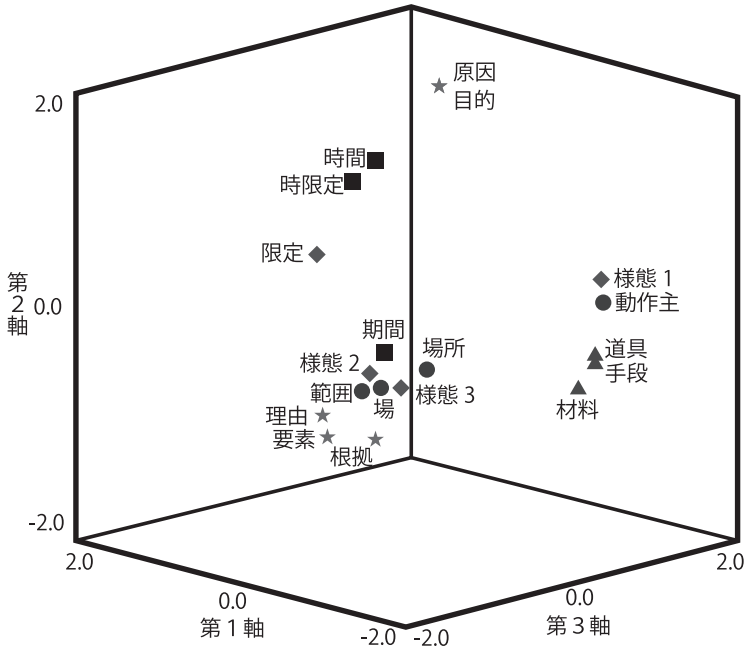

図５ CJL の多次元尺度解析の結果

そうである。但し KJL 同様、例外が多く、カテゴリー化の意味基準として十分に確立されていない。

用法別に見ていくと、まず＜場所＞は④動作主が第 1 軸（空間性）で－となってしまっている。これは「警察」が「警察署」という場所の意味（空間性＋）で用いられているが、「警察官」という人の意味（空間性－）で解釈してしまったことが原因であろう。

＜時間＞用法では、第 1 軸（空間性）で⑤時間、⑥期間、⑦時限定が＋となるなど、3 つの用法が＋となっているが、第 2 軸では⑥期間が－、⑤時間、⑦時限定が＋となり、両者は離れていて、1 つのカテゴリーとしてまとまっていない。第 3 軸の数値は±であり、JNS が「抽象性」が高いとしたのとは異なっている。なお、⑥期間が⑤時間、⑦時限定とは遠い位置にあるが、これは⑥の例文で「過程」は時間的な意味で用いられているにもかかわらず、「過程」という語の本来的な意味は空間的な意味であることから、学習者はその表面的で本来的な意味に影響を受け、＜場所＞用法に近いと判断したものと思われる。

＜道具＞用法では第 1 軸（空間性）で⑧道具、⑨手段、⑩材料が－（個体的）、第 3 軸（具体性）で＋（具体的）、第 2 軸でも±でそろっており、カテゴリーとしてそれなりにまとまっている。

＜原因＞用法では、第 2 軸が明確に「能動性」を示しておらず、また用法間では⑪原因と⑮目的とは近くにあるが、その他の距離は拡散しており、カテゴリーとしてのまとまりにも欠けている。

＜様態＞用法も 3 つの軸とも用法間にまとまりがない。用法間で見ると、⑰様態 2 と⑱様態 3 は近いものの、⑯様態 1、⑲数量限定はかなり離れていてカテゴリーとしてのまとまりに欠ける。

カテゴリー内の関係を見ても、＜道具＞（⑧道具、⑨手段、⑩材料）ではまとまっているものの、＜場所＞（①場所、②場、③範囲、④動作主）では④動作主が外れ、＜時間＞（⑤時間、⑥期間、⑦時限定）では⑥期間が、＜原因＞（⑪原因、⑫理由、⑬根拠、⑭構成要素、⑮目的）では⑪原因と⑮目的とは近くにあるが、その他は拡散しており、＜様態＞（⑯様態 1、⑰様態 2、⑱様態 3、⑲数量限定）では、⑰様態 2 と⑱様態 3 は近いものの、⑯様態 1、⑲数量限定とがかなり離れている。したがって＜道具＞は確立されたがその他で JNS のカテゴリーと食い違いが見られている。

4.4　学習者のデのカテゴリー形成

以上、JNS と KJL、CJL を対象に、デのカテゴリーがどのように形成されているか、学習者と母語話者のそれとどのように異なっているかを見てきた。本書の結果をまとめると、

①どちらの学習者も、カテゴリー形成が発達途上（中間言語）である。KJL では＜場所＞、CJL では＜道具＞の用法はかなり確立しているものの、その他の用法はまだ十分に確立されておらず、また、その意味構造が JNS のものとは異なっていた。

②学習者の構造は JNS のようにカテゴリーとしてまとまっていない。「過程で」を「場所」にカテゴリー化するなど、デ格名詞の（表面的な）意味などに影響を受けていた。また各カテゴリーの非プロトタイプ的用法はプロトタイプ的な用法からかなり離れたところにあったり（例えば KJL では＜道具＞の⑩材料、＜原因＞の⑭構成要素、CJL では＜場所＞の④動作主など）、カテゴリーとしてまとまりがなかったり（例えば CJL での＜原因＞など）、プロトタイプ的な用法からの拡張とカテゴリー化がうまくなされていなかった。

③学習者のカテゴリー化の遅れは、JNS が明確に持っている「空間性」、「具体性」、「能動性」といったカテゴリー化の意味的基準が学習者において明確化されていないことが原因の一つである。

これらの結果は、基本的には今井（1993）や Shirai（1995）を裏付けるものとなった。但し、今回の結果では、

母語の影響についてはそれほど明らかにならなかった。KJL と CJL のカテゴリー構造を比べると、いくつかの違いが見られた。第一にカテゴリー形成の進展は CJL よりも KJL のほうが進んでいた。これは韓国語には日本語と同様、格助詞を有するが、中国語には格助詞がなく、習得が難しいことが原因であるかもしれないが、今回の KJL と CJL の学習レベルが同じである保証はなく、これだけでは判断がつかない。第二に、KJL では＜場所＞、CJL では＜道具＞の習得が他の用法に比べて進んでおり、KJL と CJL との間にはカテゴリー化の進展に若干の違いが見られた。しかしながらこれが母語の影響なのか、それとも教え方の影響なのか、今の段階では何とも言い難い。

5. まとめと今後の課題

本稿は格助詞デについて、認知言語学的な観点から、日本語母語話者と日本語学習者とが形成しているデのカテゴリー構造がどのようなものであるか、実証的に明らかにすることを試みた。今回の調査では、日本語母語話者と日本語学習者のデの意味カテゴリー構造は異なっていること、拡散的でまとまりがなくカテゴリー化が進んでいないことなど、先行研究の主張を支持する結果となった。

しかしながら日本語母語話者と日本語学習者、KJL と CJL とのカテゴリー化の違いはどのような要因によってもたらされているのかについては明らかにならなかった。今後、それについての研究を進め、日本語教育現場に何か示唆を与えられればと思っている。

注

1　Lakoff はこれを「放射状カテゴリー構造」、Langacker は「ネットワーク・カテゴリー構造」と呼んでいる。
2　有標性の「無標」と「プロトタイプ」とが類似の概念であることについては、Lakoff（1987）を参照。
3　プロトタイプの用法のほうが習得が早いということに関しては、反例がないわけではない。これに関しては早瀬・堀田（2005）の７～８章を参照。

参考文献

今井むつみ（1993）「外国語学習者の語彙学習における問題点―言葉の意味表象の見地から―」『教育心理学研究』41：243-253. 日本教育心理学会 .

岡智之（2007）「日本語教育への認知言語学の応用～多義語、特に格助詞を中心に～」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』58：467-481. 東京学芸大学 .

菅井三実（1997）「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』12（文学43）：23-40. 名古屋大学文学部 .

菅井三実（2001）「現代日本語における格の暫定的体系化」『言語表現研究』17：109-119. 兵庫教育大学言語表現学会 .

杉村泰（2002）「イメージで教える日本語の格助詞」『言語文化研究叢書』1：39-55. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 .

田中茂範（1989）『基本動詞の意味論－コアとプロタイプ』三友社出版 .

早瀬尚子、堀田優子（2005）『認知文法の新展開 : カテゴリー化と用法基盤モデル』研究社.

間淵洋子（2000）「格助詞『で』の意味拡張に関する一考察」『国語学』51：15-30. 国語学会 .

水口里香、森山新（2006）「日本語学習者と日本語母語話者が持つデのカテゴリー構造比較」『日本学報』66：43-54. 韓国日本学会 .

森山新（2002）「認知的観点から見た格助詞デの意味構造」『日本語教育』115：1-10. 日本語教育学会 .

森山新（2004）「格助詞デの放射状カテゴリー構造と習得との関係」『日本認知言語学会論文集』4：66-75. 日本認知言語学会 .

森山新（2007）「第二言語としての日本語の多義語の習得と日本語教育への応用：格助詞ヲ、ニ、デの意味構造とその習得」『JCLA Conference 2007』138-141. 日本認知言語学会.

Dewell, R. B.（1994）Over again：Image-Schema Transformations in Semantic Analysis. *Cognitive Linguistics* 5：351-380.

Lakoff, G.（1987）*Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press.

Langacker, R. W.（1991）*Foundations of cognitive grammar*. Vol.2. Stanford University Press.

Norvig, P. & G. Lakoff.（1987）Taking：A Study in Lexical Network Theory. *BLS* 13：195-206.

Shirai, Y.（1995）The Acquisition of the basic verb PUT by Japanese EFL Learners：Prototype and Transfer.『語学教育研究論叢』12：61-92. 大東文化大学語学教育研究所.

Tomasello, M.（2003）*Constructing a Language：A Usage-based Theory of Language Acquisition*, Cambridge, MA, and London：Harvard University Press.